

主體化與語義變化的動力

— 以日語的「テイル」爲例

林志原

義守大學應用日語系助理教授

摘要

本稿主要是針對日語的補助動詞「テイル」的語意作分析。目前大多數對於現代日語「體」(aspect)的研究，都將「テシマウ」「テイル」「テオク」等「體」的補助動詞當成一個格式塔(Gestalt)來研究，本稿將從符號學的觀點，透過主體化(subjectification)的過程對「テイル」的語意變化作詳細的探討。

首先從本動詞「いる」的「存在」觀點出發，藉由主體化的過程中觀察從本動詞到補助動詞「テイル」的語意變化，找出「テイル」的圖式(schema)的語意並以此爲基礎，透過語用論及隱喻的觀點來對「テイル」的語意作分析。也就是說，從符號學的觀點出發，把「テイル」的圖式置於不同的文脈(context)之中，觀察「テイル」所展現的動態語意表現來作探討，如此才能更接近於「テイル」這個語言形式，在日語中所對應的所有語意表現。

關鍵字：體、格式塔、隱喻、主體化、語法化

The Dynamics of Subjectification and Semantic Varieties

Take “TE-IRU“ in Japanese as an Example

Chih Yuan Lin

Assistant Professor, Department of Applied Japanese of I-Shou University, Taiwan

Abstract

This paper is an analysis on the semantics of the compound verb TE-IRU in Japanese. In previous research on the aspect of the compound verb of modern Japanese, TE-SHIMAU, TE-IRU, and TE-OKU are usually treated as Gestalt. Taking the viewpoint of semiotics, this paper tries to discuss the meaning of TE-IRU by subjectification of cognitive subject. The paper also discusses the meaning of schema in the process of subjectification when verb IRU is in existence. On this basis, the semantic meaning of TE-IRU is analyzed by way of pragmatics and metaphor. The author believes that putting the schema of TE-IRU in different contexts and revealing the semantic dynamics of them will enable us to see more clearly the linguistic behaviors of TE-IRU.

Key Words: aspect, Gestalt, metaphor, subjectification, grammaticalization

主体化と意味変化のダイナミズム

—日本語の「テイル」を中心として

林志原

義守大学応用日本語学科助理教授

要 旨

本稿では、日本語の補助動詞「テイル」について、詳しく意味分析をすることにする。現代における日本語のアスペクト研究は金田一(1950)の「国語動詞の一分類」をきっかけにして、体系的にアスペクトの研究が始まると言っても過言ではない。吉川武時(1973)、奥田靖雄(1977、1978)、高橋太郎(1985)、工藤真由美(1995)などの研究を経て、文法研究の中に輝いた成果が納まった。

従来のアスペクト研究において、常に「テシマウ」「テイル」「テオク」「テイル」などの補助動詞をひとつのゲシュタルトとして捉えて論じてきた。本稿では、主に主体化及び記号論の観点から、「テイル」の意味変化のダイナミズムを探求する。また論用論のレベルにおいて、「テイル」のスキーマ的意味は異なったコンテキストの中において、意味をどのように読み取れるかについて探求する。

キーワード : アスペクト、ゲシュタルト、メタファー、主体化、文法化

一、はじめに

周知のとおり、現代における日本語のアスペクト研究は金田一(1950)の「国語動詞の一分類」(金田一、1976)をきっかけにして体系的に始まると言っても過言ではない。奥田(1977、1978)、高橋(1985)、工藤(1995)などの研究を経て、文法研究の中に輝かしい成果をもたらした。

多くの研究においては、「テイル」の前接動詞の意味素性に力点を置いて、詳しく検討し、動詞の語彙の意味によって、動詞分類が行われる。あるいは、文脈の中から、アスペクトの意味を検討する研究もある。本稿では、主体化(Subjectification)¹の観点を通して、本動詞「いる」の「存在」の意味から、補助動詞「テイル」までの文法化のプロセスを観察していく。動詞の主体化、すなわち、認知主体が異なる視点(perspective)や心的走査(mental scanning)などを通して本動詞から文法化するプロセスを観察して、どのように、記号の

意味が動的に変化しているかあるいは、どのように、前接動詞と結合したり、文脈の中において、意味を表出したりするかを検討することによって、「テイル」の意味を探求する。

二、先行研究

「テイル」に関する研究は数え切れないほど多いが、その中でいくつかの代表的論述としては金田一(1950)、奥田(1977、1978)、寺村(1984)、工藤(1995)などが挙げられる。

金田一(1950)では、「テイル」につけるかどうかによって、動詞を二つのタイプが分けられており、さらに動詞を「テイル」につけた場合の、その意味によって、継続動詞、瞬間動詞、第四類動詞と名付けている。寺村(1984:125)では、「テイル」の意味を語りながら、奥田、金田一などの論説を比較して、ほぼ次のようにまとめている。

すなわち、「テイル」はふつう二つの基本的な意味として取り上げられている。一つは「動作や現象が継続していること」を表すことであり、もう一つは「ある過去の出来事が終わって、その結果がいまある状態として、残っていること」である。奥田(1977、1978)では、「テイル」の基本的な意味は「継続」という一つ意味として捉え、そして、その「継続」が「主体の継続」と「主体の変化」に分けられている。奥田の言う「主体の継続」は金田一(1950)の「継

¹ Subjectification は、主体化とも主観化とも言われており、さらに黒滝(2005:114)のように、Traugott(1995)の言う

「Subjectification」を「主観化」と、Langacker(1990)の「主体化」と言い分けられている例もある。同じ用語を使っている二人の論点には異なっている観点も見られるが、両者とも文法化の一つのメカニズムとしてとらえる。本稿で扱われている

「Subjectification」はより包括的に把握しているので、「主体化」と「主観化」を分けないで、一つの用語として扱っている。

続動詞」、寺村の「動作や現象が継続していること」にあてはまっている。また、奥田の「主体の変化」は金田一の「瞬間動詞」、寺村の「ある過去の出来事が終わって、その結果がいまある状態として残っていること」という概念によく似ている。

上のように、寺村、金田一、奥田などの研究では、特に「テイル」に前接した動詞の語彙的意味から「テイル」の意味表現を探求してきた。だが、本稿では、「テイル」の意味は本動詞「いる」から派生した「ある状態がある観察時間の中に存在すること」として捉えて、本動詞から補助動詞へのプロセスが認知主体の認知メカニズムとどのように関わっているのかを中心として、自然言語のダイナミズムをより体系的に解明しようとする。

三、「いる」の意味ネットワーク

一つの言葉が多数の意味を持っていることはごく普通である。言語の経済性から考えると、多義語の存在は当たり前のことである。瀬戸（2007）には多義語について、以下のように詳しく書いてある。

多義とは、複数の意味が一語の中で密接に関連して存在する現象である。現在、意義が固定した特殊な専門語や意義が希薄化したごく一部の機能語を除けば、たいていの語は大なり小なり多義語である。一般の辞書は、多義語の意義をばら

して個々に記述するが、各意義の関連についてはほとんど何も触れない。その結果、一語の中の複数の意義は意味的関連性を失い、あたかも同音異義語のように狭い空間にひしめき合うことになる。

(p3)

したがって、「いる」の意味を調べるため、辞典の中に羅列している意味をどのように捉えて、中心的意味をどう設定するか、またその中心的意味がどのように派生するか、その仕組みをより正しく記述することは人間の認知メカニズムを解明することに役に立つと思われる。以下では、「いる」の意味を詳しく検討して、意味のネットワークを構築する。

(一)、「いる」の意味

『広辞苑』『明鏡』『日本語大辞典』『大辞林』の中に、羅列している「いる」の意味を整理すると、以下のようにまとめられる。

- ①人や動物がある場所にある。
- ②ある場所に住む。
- ③鳥や虫などがあるものにとまる。

上の三つの意味から考えると、すべて①の意味から派生した意味だと思われる。

「いる」のスキーマ的意味はほぼ『広辞苑』に書いてあるようにまとめられる。すなわち、「いる」のスキーマ的意味は「動

主體化與語義變化的動力～以日語的「テイル」為例

くものが一つの場所に存在する意味であり、現代語では動くを意識したものが存在する意で用いて、意識しないものが存在する意の「ある」と使い分ける。」(広辞苑、p195) のようにとらえられる。また、「いる」の主体化について、次の例を見てみよう。

- (1)、「工場の壁に『一射入魂』と書かれた紙が貼ってあったらどう？ あの言葉は、アーチェリーをする人間が使っていたものだ。昔、アーチェリー 一部に友人がいて、聞いたことがあったんだ。矢島忠昭の経歴を細かく調べてみるといい。八十パーセント以上の確率で、アーチェリー経験者だと思うね」(『予知夢』、p200)
- (2)、「試合はダブルスで行われていた。一方のチームに湯川学がいる。彼がこれからサーブをするところだった。(『探偵ガリレオ』、p148)

(1) (2) は空間の存在という意味から認知主体の操作によって、組織の存在などの意味も表れる。

(二)、「いる」の意味ネットワーク

意味ネットワークは一つの形式から複数の意味を派生している関係によって、その形式に対応している記号内容の派生関係を正確に把握するため、構築したモデルであり、そのモデルによって、意味の内部構

造を解明する一つの手段である。また、中心義からの派生関係を主にメタファー・メトニミー・シネクドキなどの観点によって、検討している。それに関して、瀬戸(2007)は以下のように、述べている。

「意味ネットワーク」は、中心義からの意義展開が、メタファー・メトニミー・シネクドキのいずれかに基づくことを示す。また、それぞれの派生義からさらにメタファー・メトニミー・シネクドキのいずれかに基づいて新たな意義が展開することを示している。(p5)

現代日本語における「いる」の意味は比較的単純であり、スキーマは『広辞苑』が述べていたように「動くものが一つの場所に存在する意。現代語では動くを意識したものが存在する意で用い、意識しないものが存在する意の「ある」と使い分ける。」として捉えられると思われる。プロトタイプの意味(中心義)は「①人や動物がある場所にある」として取り上げられる。「②ある場所に住む」と「③鳥や虫などがあるものにとまる」は①の意味からメタファーとして派生したものだと考えられる。

四、「テイル」の意味ネットワーク

これまでの「テイル」に関する研究は主に「テイル」に前接している動詞の意味

について、様々な視点から詳しく検討して、動詞を意味のタイプによって分類してきた。ただし、動詞分類は異なったコンテキストによって、ほかの動詞タイプに移行したり、二つ以上のタイプに跨っていたりすることもしばしば見られる。本稿では、本動詞「いる」の意味から補助動詞「テイル」への文法化のプロセスを探求して、言語主体が外部世界をどのように把握していくか、そのプロセスを観察することによって、人間の知的メカニズムを解明しようと思う。以下では、「テイル」の意味について検討して、「テイル」の意味構造を構築し、意味ネットワークを作成する。

(一)、「テイル」の意味

Hopper&Traugott (1993)では、文法化における推論過程を理解するとき、二つの原理が考えられるとされる。一つは、意味は、もともとの語彙の意味から比喩的推論か概念的換喩的推論のどちらかによって派生されうるということである。そして、もう一つはどんな文法化でも意味が突然なくなることはありえないということである²。この観点は「テイル」の文法化のプロセスとよく似ている。本動詞「いる」の語彙の意味である存在の意味は補助動詞「テイル」に継承されている。また、メタファーによって、様々な意味が派生している。その一

連の主体化或いは文法化によって、文法範疇が変わっていくことが見られることから、その意味的变化のプロセスは決して恣意的ではなく、有契性(motivation)があると思われる。

上に引いたように、「どんな文法化でも意味が突然なくなることはありえない」ことから考えると、空間的存在の「いる」は時間的存在を表すアスペクトへの文法化のプロセスの中で空間と時間との交替している段階があるかどうかを究明する必要があると思われる。まず、『広辞苑』『明鏡』『日本語大辞典』『大辞林』の中に、羅列している補助動詞「テイル」の意味は主に次のように四つまとめられる。

- ①、主体の動きを表す動詞について、その動きが継続・進行中の意味を表す。
- ②、主体の変化を表す動詞について、その結果の継続していることを表す。
- ③、その動作が習慣的に反復されることを表す。
- ④、過去に完了した動作を表す。

この四つの意味が本動詞から継承した意味の派生関係を検討することによって、主体化のメカニズムを検討する。

(二)、「テイル」の意味ネットワーク

上のように、「テイル」という記号形式の中に四つの意味が見られるが、果たしてそれらの意味はどのような内部構造をして

² Hopper&Traugott(1993)[日野資成訳 2003、p.110 参照]

主體化與語義變化的動力～以日語的「テイル」為例

いるのか。その意味の内部構造を解明するため、プロトタイプとスキーマと意味の派生関係を観察して意味ネットワークを構築する必要がある。

「テイル」のプロトタイプの意味は「①ある動作がある観察時において、存在する」ことであり、「進行中、継続している」という意味である。また、②の意味はプロトタイプの意味から抽象化して「動作が行われた結果状態が観察時に持続していること」が派生する。③は習慣的動作または反復動作が点として認められて、認知主体による心的走査の観察を通して、反復している点が線として捉えられる。④は動作が完了したその記録や効力が観察時において残っていることである。

「テイル」の意味ネットワークは、プロトタイプの意味である①がメタファーによって、②③の意味を派生する。また、②はメタファーによって、④を派生したと考えられる。「テイル」のスキーマの意味は、観察時において、動作・効力の存在することだと思われる。

五、主体化

従来、言語表現における認知主体に関する心的態度（推論、認識、判断など）の研究は主として助動詞（will、can など）や心理動詞（seem など）を対象として研究している。しかし、最近では、主体化に関する研究、特に Langacker (1990, 1999) の観点がよくとりあげられている。

Langacker はすべての言語表現には主体の解釈が内在していると主張している。（舩山、深田 2003、107-8、参照）

主体化に関する研究には代表的な二つの流れがある。一つは Langacker の共時的研究であり、もう一つは Traugott、Hopper などの通時的研究である。さらに言うと、Langacker は視点 (perspective) と観察排列 (viewing arrangement) によって、主体化の仕組みを論じている。Traugott、Hopper などは通時的研究によって、語用論的推論から主体化または文法化の仕組みを検討してきた。

Langacker (1998:88)³は、以下のように主体化を定義している。

主体化とは、言語表現の語彙的意味のなかに、本来内在し、その意味でその語彙的意味の最も深い特性を構成している概念的操作が顕在化することを言う。

言語の世界には、言語主体が外部世界を解釈していくときに無意識的に認知の制約が反映されている。人間の認知プロセスの解明は、言葉のメカニズムを明らかにしてだけでなく、人間の認知のメカニズムをあきらかにしていくための重要な方法の一つである。（山梨、2000、p56）

言い換えれば、人間の知的メカニズム

³ 舩山、深田(2003 : 108)から再録。

は、抽象化しており、それを直接的に分析することは非常に難しい。そこで、言葉を分析することは、人間の認知メカニズムを解明していく大切な方法の一つである。

認知主体が外部世界を解釈していくプロセスは言葉の形態、構造、意味などの様々な側面に制約を与えている。日常言語は人間の様々な感覚、感情などの感性、身体性によって動機付けられており、一つの記号形式は異なった文脈において、常に認知主体の把握によって、動的に解釈されている。「テイル」の場合、プロトタイプの意味は「観察時間内に存在している」ことである。

主体化は認知主体が語彙的意味を漂白化して、徐々に機能語へ変わっていくプロセスである。言い換えれば、主体化は文法化のプロセスであり、文法化は主体化の結果だと考えられる。

(一)、主体化

認知言語学において、言語主体がどのような視点によって、出来事を認識するかということが事態の把握である。つまり、同じ事象を異なる視点で捉えると、表出した意味も異なる。言い換えれば、主体化とは、私たちの主観的な「捉え方」(construal)の反映であることを体系的に明らかにしているということである。さらに言うと、言語表現はすべて主観的であり、純粋に客観的なものはないという見方である。(池上、2006、参照)

本研究では、主に認知言語学の視点から、本動詞「いる」の語彙的意味から補助動詞までの意味拡張について検討する。特に主体化に焦点を置き、認知主体がどのような視点によって事象を捉えるかを観察して、その主体化のプロセスから「テイル」の意味派生のメカニズムを解明する。

認知言語学における研究は、認知主体の五感や運動感覚、情緒などの要素を含めて検討する。それは言語の中に、事態をどう解釈するかという主体の認知モードが反映されているからである。一言で言うと、言語は外部世界を鏡のように直接に反映していることではなく、認知主体の概念構造を通して、外界事象を把握して、コード化することである。したがって、あらゆる言語表現には、認知主体の主観的な解釈が反映されている。

(二)、「いる」から「テイル」への主体化

自然言語を考えると、その中に記号間の相互的に対立したり、制約したりするだけではなく、人間の生まれてきた積み重ねた経験または外部世界との作用にも深く関わっている。その中には特に概念メタファーと主体化が挙げられる。例えば、私たちは様々なことを経験したが、それらの経験を語る時、常に具体物をあげて比喩化して、言語化する。それによって聞き手は抽象的なことが分かりやすくなる。もう一つは、私たちは外部世界または意味を範疇化する時、常に空間メタファーや主体化などの概

主體化與語義變化的動力～以日語的「テイル」為例

念を用いて、一つ一つの範疇を分けていることがよく見られる。

「いる」のプロトタイプの意味（中心義）は「人や動物がある場所・状態にある」として取り上げられる。補助動詞「テイル」は「いる」のそのプロトタイプの意味から「ある動作・状態がある観察時において存在する」へ派生したことが見られる。アスペクトを論じる時、この主体化、空間メタファーという二つの概念は欠かせないと思われる。本稿で主に扱われている日本語のアスペクト表現の「テイル」はふつう時間にかかわる補助動詞として捉えられているが、実際には本動詞（いる）から派生した空間に存在した意味も見られる。例えば、以下の例を見てみよう。

(3)、穏やかな青空が広がっている。暖かく、快適な陽気だ。顔にぼかぼかした陽射しが当たる。気持ちいい。
(『エンド・ゲーム』、p185)

(4)、不思議な気分だった。どうしてこんなところを歩いているのか、考える
と頭がこんがらがってくる。

しかし、空は青く、空気は暖かく、どこまでも懐かしく静かな風景が続いている。(『エンド・ゲーム』、p187)

これらの例文を見ると、コンテキスト

において、「ルビンの盃」⁴において常に図と地が競合的に視点が変わるように、時間的持続性と空間的存在の両方の意味が競合的に読みとられる。一般的に言えば、「テイル」はアスペクト文法範疇の一つであり、時間的概念に関わっている。ただし、コンテキストによって、主体化のプロセスを経て、本動詞（いる）から受けてきた空間的存在も見られる。例えば、次の例を見てみよう。

(5)、みんなはどこにいるのかしら。

再び、時間の感覚が消えた。鏡の中にいるような、柱だけの世界。後ろを振り返っても、前を見ても、左右を見ても、見渡す限り柱だけがどこまでも続いている。(『エンド・ゲーム』、p232)

これらの例は「時間の感覚が消えた」、「見渡す限り」、「どこまでも」によって、空間的概念が前景化していることが明らかである。

また、主体化によって、観察時点において、動作を具体的にとらえて、いきいきとして目の前に進行していることが表れる。例えば、次の例を見てみよう。

⁴ 「ルビンの盃は、何を背景とするか、何を前景とするかによって、盃にも2人の横顔にも見える。」その注目はゲシュタルト心理学に遡る。(松本、2003:5、参照)

- (6)、火浦は、相変わらず落ち着き払っていた。向かい側のソファに浅く腰掛け、こちらに身を乗り出して静かにタバコを吸っている。(『エンド・ゲーム』、p164)
- (7)、ふと気がつくと、吹き出した血がタンクの中に流れ込み、サイダーを桃色に染めていた。その澄んだ色が、泡と一緒にぷつぷつと弾けていた。(『薬指の標本』、p12)

これらの例のように、「テイル」の意味は本動詞（いる）の意味が抽象化して空間的に存在していることが観察時間において、動作がいきいきと進行していることが表れている。

- (8)、刑事たちが去ってから十分以上待って、石神は部屋を出た。ちらりと隣の部屋を見る。二〇四号室に明かりが灯っているのを確認して、階段を下りた。(『容疑者 X の献身』、p80)
- (9)、ここには数え切れないほどの小部屋があり、その他に、中庭と屋上と地下室があり、機能していないとはいえない大きな浴場までついているのだ。(『薬指の標本』、p10)

本動詞「いる」は空間に存在しているという概念によって、主観化の操作によって、空間に存在している物が動作・作用に

変わって、存在していることとしてとらえられる。もし、主体による外部世界の観察をデジタルカメラに喩えれば、カメラの画面が空間として認識しており、「テイル」はデジタルカメラの画面に当たっており、認知主体がその画面を通して、画面の中の動作・作用を認識して言語化するプロセスである。(6) (7) の例は画面の中に実質的にいきいきと動的動作を表すことである。(8) (9) は動作が完成した画面の中に静的状態として現れるが、認知主体が認知的メカニズムによって、その画面を超えて、その動作のプロセスを心的走査を通して、観察することができる。

- (10)、罫のそばで大量の空き缶を潰している男がいた。そうした光景はこれまでにも何度か見ているので、石神はひそかに『缶男』という渾名をつけていた。(『容疑者 X の献身』、p7)

上の例は観察時点において、点としてとらえているが、もっと観察の時間の幅を広げれば、一つ一つの点が線としてとらえられることになる。また、この場合は、認知主体がその視点を広げて、目の前の動作や作用だけでなく、より幅広く時間をとらえて、たくさんの動作や作用を心的走査によって、その一連の点に在る動作や作用を線として把握していることになる。そこで、この表現は主体性が前の三つの段階より高

主體化與語義變化的動力～以日語的「テイル」為例

くなることが見られる。

- (11)、夏が来ました。伸びやかな青空に、もくもくと入道雲がそびえています。(『蒲公英草紙』、p181)

上の例文は主体化の操作によって、徐々に語彙化していく一つのゲシュタルトになって、文法範疇が変更しており、全体的にとらえて、動詞の性質が失われており、形容詞のように「動詞+テイル」が全体としてとらえて可分析性が徐々に失われつつある。語彙化して、一つの語彙になりつつあり、動詞の活用も徐々に単純化になり、ある部分の活用形の働きが失っていることが見られる。例えば、(11)の「そびえている」は「そびえる」を用いることができないということが主体化によって、徐々に語彙化(またはイディオム化)していることが見られる。

これまで「テイル」について、主体化のプロセスを検討してきたが、「テイル」が本動詞(いる)から受けた「空間に存在する」という意味は「テイル」において、作用・動作がある観察時において存在しているということである。さらに、認知主体の主体化の操作によって、様々な段階が見られる。ただし、進行中または動作が完成した結果の持続などの意味はコンテキストによって、派生した意味としてとらえられる。「テイル」はデジタルカメラの画面のように、ある動作・作用を観察して認知主

体が主体化を通して視点あるいは心的走査の操作によって、画面の中にある動作や作用を動的にとらえる。例えば、次の例を見てみよう。

- (12)、バーナーの火を受けなくなってもガラス棒は強い光を発し続けている。電球も点ったままだ。(『予知夢』、p127)
- (13)、若い男は先生の解説に礼儀正しくうなずきながら、時々この清掃技術のすばらしさについて口をはさんでいた。そして先生はずっと喋り続けていた。(『まぶた』、p111)

上の例のように、「発し続ける」「喋り続ける」のような複合動詞その動詞自身が動作・作用が持続している語彙的意味を持っているので、「テイル」をつけなくても持続している意味を表すことができる。そこで、「テイル」の時間の持続などの派生的意味はコンテキストに由来するものだと思われる。「テイル」は「いる」から継承した「空間存在」の意味が認知主体の主体化によって、デジタルカメラの画面のような心理的・抽象的観察画面を通して、外部世界を観察し、言語化する道具の一つだと考えられる。

最後に、本動詞(いる)から補助動詞(テイル)までの主体化のプロセスを簡単にまとめて図にすると(図1)のようになる。

主體化與語義變化的動力～以日語的「テイル」為例

- 年。
- 奥田靖雄、「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」(宮城教育大学、『国語国文』8、奥田靖雄 1985『ことばの研究・序説』、東京：むぎ書房(85-104)に所収、1977年。
- _____、「アスペクトの研究をめぐって」、『教育国語』53,54)、奥田靖雄 1985『ことばの研究・序説』東京：むぎ書房(105-143)に所収、1978年。
- 河上誓作、『認知言語学の基礎』、東京：研究社、1996年。
- 北原保雄、『明鏡国語辞典』、東京：大修館書店、2002年。
- 金水敏、「時の表現」、『日本語の文法2、時・否定と取り立て』東京：岩波書店、2000年。
- 金田一春彦(編)、『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房、1976。
- 工藤真由美、『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』、東京：ひつじ書房、1995年。
- 新村出、『広辞苑第五版』、東京：岩波書店、1998年。
- 黒滝真理子、『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英語対照研究』、東京：くろしお出版、2005年。
- 瀬戸賢一、『英語多義ネットワーク辞典』、東京：小学館、2007年。
- 高橋太郎、『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』、東京：秀英出版、1985年。
- 寺村秀夫、『日本語のシンタクスと意味 I』、東京：くろしお出版、1981年。
- _____、『日本語のシンタクスと意味 II』、東京：くろしお出版、1984年。
- 仁田義雄など、『現代日本語文法3—第5部アスペクト、第6部テンス、第7部肯否』、日本語記述文法研究会編、東京：くろしお出版、2007年。
- 深田智・仲本康一郎『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ』、東京：研究社、2008年。
- 辻幸夫(編)、『認知言語学キーワード事典』、東京：研究社、2002年。
- 松村明(編)、『大辞林第二版新装版』東京：三省堂、1999年。
- 松本曜、『認知意味論③』、東京：大修館書店、2003年。
- 初山洋介・深田智「意味の拡張」『認知意味論③』東京：大修館書店、2003年。
- 山梨正明、『認知言語学原理』、東京：くろしお出版、2000年。
- _____、『認知構文論—文法のゲシュタルト性』、東京：大修館書店、2009年。
- 吉川武時、「現代日本語動詞のアスペクトの研究」、金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房、1973年。
- Hopper&Traugott. GRAMMATICALIZATION. Cambridge University. 1993.
- [日野資成訳、『文法化』、福岡：九州大学出版会、2003年。]
- Langacker, R, W. Foundations of cogni-

tive grammar, Vol, 1: Theoretical prerequisites. Stanford University Press, 1987.

例文出自

『容疑者 X の献身』 東野圭吾 文春文庫

『蒲公英草子』 恩田陸 集英社文庫

『エンド・ゲーム』 恩田陸 集英社文庫

『薬指の標本』 小川洋子 新潮文庫

『まぶた』 小川洋子 新潮文庫

『予知夢』 東野圭吾 文春文庫

『探偵ガリレオ』 東野圭吾 文春文庫